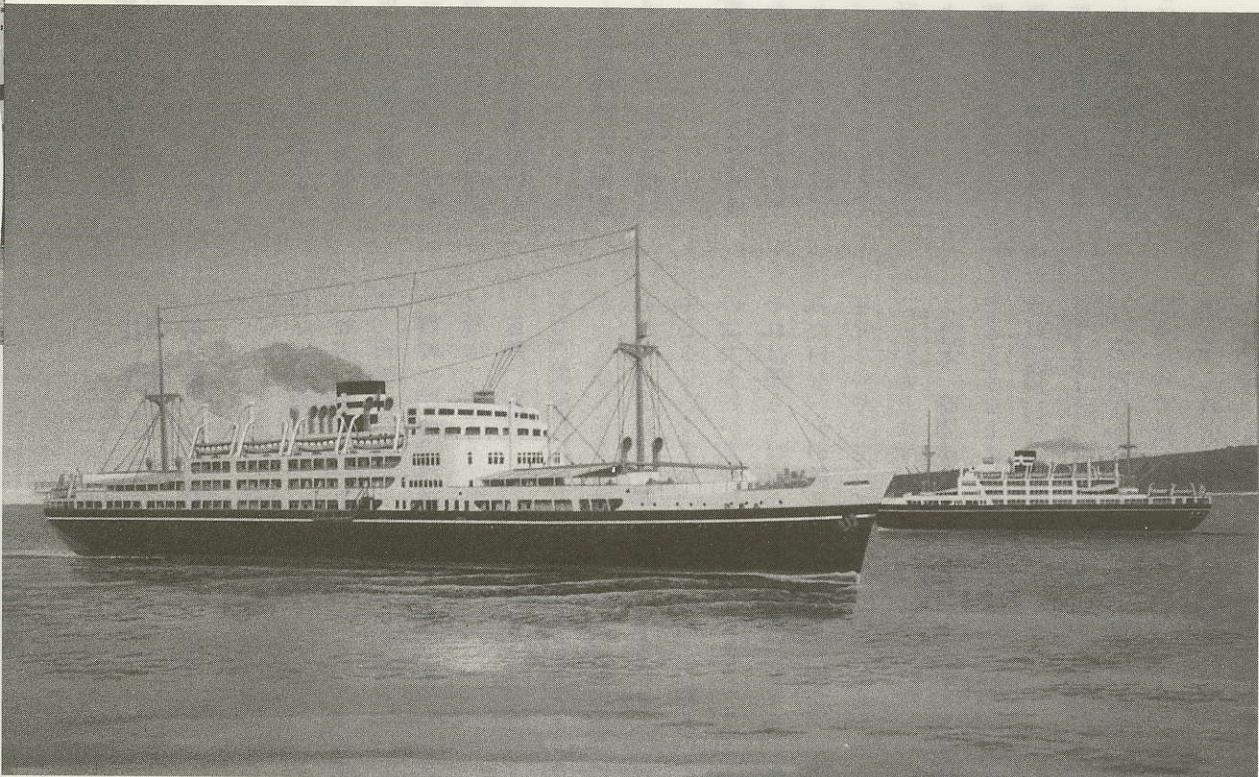


筑紫丸

《主要目》貨客船、大阪商船所属、8,136総トン
主機蒸気タービン2基、出力8,794馬力、最高速力18.6ノット
旅客定員779人、1943年川崎重工業建造

イスラム巡礼船に変身した日本船



イラスト＝西村慶明

イスラム巡礼の世界

船にもいろいろあるが、イスラム巡礼船ほどの変わり種は他はないだろう。イスラム巡礼船というのは、イスラム教徒が、アラビア半島の西部にある聖地メッカを巡礼するのに使う船のことだ。

メッカ巡礼は、礼拝、断食などと並ぶイスラム教徒の五大義務の一つであり、聖典コーランは“余裕がある限り行わねばならない”と定めている。イスラム暦十二月の「ズ・ル・ヒッジャ」(巡礼月)の七日から十日までに行われる行事を「ハッジ」(大巡礼)と呼び、それ以外の時期に行われる「ウムラ」(小巡礼)と区別しているが、一般にメッカ巡礼と言うと、「ハッジ」を指している。

毎年この月になると、中東はもちろんのこと、世界各地から巡礼団がメッカにやってくる。その数は約二百万人という。

メッカに近い人々は自動車で。アフリカやアジアの巡礼団は、船で紅海のジッダ港に着き、そこからメッカに向かう。遠隔地のインドネシア、マレーシア、パキスタンからは、一萬トン前後の船が投入されていたが、最近では旅客機が利用されることが多くなった。このようにイスラム巡礼船というのは、毎年短期間就航するだけであるから、専用の巡

礼船というのではなく、定期客船を一時転用したり、遊休貨物船に簡易客室を付けた程度のものがほとんどだ。おとなしい巡礼客が相手だから、客室グレードもサービスも最低。したがって船賃も安いが、船から溢れるほど多数の客を乗せるので、船会社には大きな稼ぎになつた。インドネシアやパキスタン、さらには北アフリカのイスラム教国では、国営の船会社がこれを運航している。

引揚船で有名な元関釜連絡船「興安丸」は晩年、巡礼シーズンになると、インドネシア人をジッダに運ぶボロい仕事に従事していた

が、このことはあまり知られていない。

ここに紹介する「筑紫丸」も、もとは日満連絡船として計画されたものだが、戦後はパキスタンの巡礼船として活躍したという異色の船歴をもつ船だ。

日満連絡船として計画

日満連絡船というのは、戦前、旧満州の玄関口・大連と阪神、門司を結んだ定期旅客船のことである。大阪商船が運航したこの航路は、日本の大陸経営を支えた基幹ルートであり、明治末年の開設以来、近海航路用の優秀

貨客船が次々と投入された。

日華事変が起つた一九三七（昭和十二）

年後半には、最新の「黒龍丸」とその姉妹船

「鴨緑丸」など十隻が就航、月間二十五航海を行つたが、この時期をピークに、便数は次第に減少へと向かっている。戦局の進展とともに、軍に徵用される船が増えたためだ。

そこで、これを増強するため、「黒龍丸」型に続く新鋭船二隻が、神戸の川崎重工業に発注された。「筑紫丸」とその姉妹船「浪速丸」がそれである。両船は、日満連絡船として設計された最後のタイプであり、客室装飾は、当時の一流デザイナーが担当した。

一番船の「筑紫丸」は、一九四〇（昭和十五）年六月に起工。翌年九月進水。進水までに一年三ヶ月かかっている。開戦直前の造船所は、艦艇の建造に忙殺されていた。

しかも、進水後、彼女は海軍に徵用され、特設潜水母艦に変身することになった。十五サンチ単装砲四門、十三ミリ単装機銃二基で武装された彼女は、一九四三（昭和十八）年三月に軍艦として竣工した。起工から完成まで、三年近くを要したわけである。

一方の「浪速丸」は、一九四〇（昭和十五）年十月に起工されたが、半年後に工事中止となつた。現在、東京の交通博物館に「浪速丸」の完成模型が展示されている。

巡礼船サファイー・E・ミラト

特設潜水母艦として完成した彼女は、戦艦

を主体とした第一艦隊の第十一潜水戦隊の旗艦となつたが、さしたる武勲もないまま終戦を迎えていた。この戦隊は練習部隊であり、内地での訓練任務に明け暮れる毎日だった。

戦後は、南方からの復員輸送に従事。その

後、瀬戸内海で係船されていたが、一九五二（昭和二十七）年一月にパキスタンのパンイスラミック・チームシップ社に売却され、イスラム巡礼船に生まれ変わった。改装工事は日立造船因島工場で行われ、多数のデッキパッセンジャー用の設備が設けられた。

新船名は「サファイー・E・ミラト」。毎年「ハッジ」のシーズンになると大巡礼団を乗せてジッダを訪れ、それ以外の時期は、東パキスタンや東アフリカへの航路に就いた。紅海、インド洋の灼熱の水域である。

彼女が巡礼船として稼働したのは八年間。一九六〇（昭和三十五）年に、火災事故により失われたと伝えられる。ただしロイズ船名録では、一九五五年版以後除籍されている。結局、「筑紫丸」と「浪速丸」は、日本船として晴れの舞台に登場することなく終わった。ここに掲げたイラストは、この二姉妹が日満航路で反航中の姿で、絵の世界でしか見ることができない情景だ。

（山田　廻生）